The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「我々は，我々自身に対しされたくない不正義を，他者に対し行ないたくない」という原則で国境線を創った国 ： そして， ライオン像はもとあった場所に戻った
Author(s)	村井，誠人
Citation	IDUN ー北欧研究ー. 2019, 23, p. 261-280
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71787
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「我々は，我々自身に対しされたくない不正義を，他者に対し行ないたくない」という原則で国境線を創った国

──そして，ライオン像はもとあった場所に戻った──

村井 誠人

はじめに

歴史を語る際に絶対に必要とされるものは，客観性であり，その客観性の担保のために史料批判は欠かせない.「科学としての歴史学」を保証する必要十分条件はそうした史料批判に尽きる．そのため，歴史検証の対象，その事象の分析者としての歴史の書き手，そしてその公表手段のすべてが，それぞれの「時間的制約」を受ける．その対象も時間の流れの中にあり，書き手も，手段もすべてそれぞれの時間の流れの中にあり，それらはまったくそれぞれが個別の文脈の中に流れていることに気づかざるを得ない.

西洋史の学徒として筆者が歩みだして初めに学んだことは，史料批判の手続きであり，日記等きわめて個人的な史料の客観的分析では，関係者の利害関係が希薄化して個別的な時間的制約が解き放たれるであろうことから，研究対象を 50 年前あたりまでとすることがほぼ限界であると教えられた.

ここに，デンマーク・ドイツ国境問題に関して言えば，1960 年代末に筆者がまず初めにこの問題に関心を払った 19 世紀半ばから後半にかけての事象は，まさに歴史的分析の対象であり，第一次世界大戦後の国境が引かれた当時の問題も歴史的分析の対象であった．その後筆者の側にも「時」が移行し，1978 年に早稲田大学文学部の教員となり，研究者として生計が成り立つ状況となって，ドイツ・ナチズムの興隆期の，第二次世界大戦時の，そして大戦直後の──当該地域における国境を南に変更したいとする希望が高まった際の──当該地域の分析・研究をすることになっていった．1945 年 5 月 5 日，5 年間のドイツ占領からデンマークが解放され，それに伴って発せられたブール首相（Vilhelm Buhl 1881-1954）による「国境は不変である（Grænsen ligger fast.）」の宣言により（5 月 9 日），戦後の国境問題の原点が明確化され，以降，今に至っても 1920 年 6 月 15 日に発効した国境線は「健在」である．筆者の歴史学の対象としての当該国境問題は，第二次世界大戦直後の少数民族問題の混乱状況に決定的に終止符を打つことになる 1955 年の「コペンハーゲン=ボン宣言（København-Bonn-Erklæringerne）」[1]まで

[1] これは，デンマーク，西ドイツ間の条約ではなく，1955 年 3 月 29 日両国がそれぞれの少数

を一括りとした流れに言及して，1997 年 2 月発行の「南スリースヴィ問題とデンマークにおける国境間の対立――デンマーク・ドイツ国境成立 75 周年に寄せて――」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第 42 輯・第 4 分冊）と題した論文にまとめた．まさに，50 年説の中にいた．

ところがである．そうしたテーマで研究をしていく諸段階において，筆者は幾度となくデンマークの国境地帯――時としては何度か，その国境の南側にも足を運んでおり――である「南ユトランド（南ユラン Sønderjylland）」を訪れており，その都度見出したその地の注目すべき変化を無視するわけにはいかない．歴史的客観性を重視するものの，まさにその地で起きている時系列とはいえ，きわめてダイナミックな「歴史的」変化を筆者が捉えずして，歴史研究者としての使命を全うすることはできない．それはきわめて重要な変化であり，それらの変遷を語らずして当該国境問題の歴史研究者としての立場は危ういと言わざるを得ない．幸いコペンハーゲン大学歴史学科（Saxo-Instituttet）には「同時代史（Samtidshistorie）」専攻分野があり，その分野では歴史研究者がその生きている時代の「同時代」における現象を史料批判と同様の観察眼をもって「歴史的文脈を持つ現象」として分析・理解することが求められているのである．そして，歴史主義における実態として突き詰めていくと，歴史事象のすべてが相対性の中に存在するということから考えると，研究対象自体が刻々として変化するものという事実，その対象を見つめる目も刻々と変化しうる観察者のものであること――己の立場や，時間の経過に従って人生経験によって理解の深さ等に影響を受けること――，そして研究を続けているまさにその間における当該対象の劇的な変化に直面したりすること，そういったすべてのことにかかわることに，筆者は本論ではあえて挑んでみたい．それは，「歴史」なのかと自問しながら．決して短くはないものの筆者の個人的体験を経たスパンにおいて――1970 年から 2011 年の 40 年間において――デンマークとドイツ間の国境問題をめぐる状況が，「憎悪」から「和解」へと至ったことをここに記したい．

1. 筆者の「南ユトランド体験」

1970 年，早春とは言い難い 3 月に，西からの強風と，雪解けの水浸しの野に悩まされながら，筆者は西に進路を取り，自転車でデンマーク・ドイツ旧国境線であったコンゲオー川を越えて南ユトランドに入った[2]．その旅行時の体験が筆者の

民族に対し個別で同一の法令を発し，それらが条約ではないことから，相手国に少数民族問題を理由に干渉することができず，ドイツの隣人としてデンマークがその対応に悩まされてきた歴史に学んだ結果の，両国同一宣言である．シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州議会選挙での，デンマーク少数民族の政治組織(SSW)に対する 5%条項が取り除かれる．

[2] その時のことは，「デンマークの国境」『北欧』8 号（北欧文化通信社 1974）74-77 頁，およ

「南ユトランド体験」の始まりである．曇天の午前中，ムーイルトゥナ（Møgeltønder）からトゥナ（Tønder）への野中の道端に自転車が倒れていて，「アル中」と思われる中年以降の男が横たわっている光景に出くわしていた．22歳の筆者には，国境問題にかかわる歴史的状況とそのことが関連しているだろうということを，当時想像できなかった．ナチズムに呼応して3千人に及ぶ人々が第二次世界大戦のドイツ占領期中における行為の廉でデンマーク国家に対する反逆罪に処され，戦後の親ドイツ住民の間では倦怠的ムードが漂っていたのであり，それがそういった光景となっていたといえよう．ちょうどその地域は，1920年の住民投票の結果では，デンマークへの復帰を求める票がかろうじて過半数となったドイツ少数民族が多い地域（デンマーク票 54.3%に対し，ドイツ票が 45.7%）で，「恐怖の四角形地域（den truede firkant）」の一番西に位置していた．

セズ（Sæd）で国境のスキールベク川（Skelbækken この位置での名称はスナオー川（Sønderåen））を渡って西ドイツに入り，国境に沿った野中の道でシェパード犬を連れた国境警備の2人の警察官と遭遇，そのうちの若い方の「カール・モルデンハウアー」の名がドイツ語の音そのものであり，ドイツに入ったという印象を得，一方，中年のもう一人とはデンマーク語でにこやかに会話したのを記憶している．その後，フレンスボー市（Flensborg ドイツ語でフレンスブルク（Flensburg））に入ったのち北上し，当時の欧州道路第4号線のクルスオー（Kruså）の国境検問所を通過してその日のうちにデンマークに戻った．そこには，「お前たちは忘れられはしない（I skal ikke blive glemt）」と刻まれた石碑があったことを記憶している．それは，1920年7月12日，デュブル（Dybbøl）での祖国復帰祭典の翌日にデンマーク王クリスチャン10世（Christian 10．1870-1947）が車での巡幸に際しクルスオーを西に向かおうとする「十字路」上で，新国境の向こう側に残留することになるフレンスボーのデンマーク系の住民が王に別れを言うために踏み越えることのできない国境の南側に参集していた．彼らに対するデンマーク国家の惜別の情を表現するものとして刻まれたものといわれる．また，祭典におけるニアゴー首相（Niels Neergaard 1854-1936）の「彼らは忘れられはしない（de skal ikke blive glemt）」の言葉から，「彼らは」を「お前たちは」に替えられたものともいえる[3]．

1980年夏にオーベンローのデンマーク内ドイツ人少数民族組織（Bund Deutscher Nordschleswiger（1945年12月1日創立））の代表に筆者はインタヴューし，またフレンスブルクでデンマーク語紙『フレンスボー新聞（*Flensborg Avis*）』の主幹であり，シュレースヴィヒ=ホルシュタイン州議会議員であったカール・

び，『デンマークを知るための68章』（明石書店，2009，初版第2刷）の「はじめに」（6-8頁）に，若干記した．

[3] Se Ernst Kaper, *Den største Stund vor Slægt har oplevet — Dybbølfesten 11. juli 1920*, Gyldendalske boghandel 1921, s. 42.

オト・マイア（Karl Otto Mayer 1928-2016）にもインタヴューをしたことで，1970年に見かけた国境の北側で複数の「アル中」とみられる人が野中の道端に倒れていたことの意味が分かった気がした．ドイツ人少数民族の代表は，彼らがいかにデンマーク国家に忠誠を感じていて，少数民族問題が完全に解消されていることを強調し，かつてのナチ思想に傾倒し，デンマーク社会に対する危険な存在であったことに反省の意を示していた．そしてインタヴューの最後に，自分たちはデンマーク内の少数民族として何ら不満はないものの，イタリアに吸収された南ティロールのドイツ語住民に対する同情の念を彼は口にした．一方，マイアは，はっきりと「今でも，我々はデンマークに帰りたいと思っており」，そしてにこやかに「ドイツ国家に対し我々は忠誠心はもっていない」と述べた．もちろん，物理的な反ドイツ活動をしようとするわけではないが，約１万人の北フリースランド人少数民族と連携しており，デンマーク系住民は約５万人からなり，彼らを象徴する標章はデンマーク国旗と同じ「ダネブロー」である．それがデンマーク国旗でもあるということを考えるとき，国境の外にあって，彼らは「デンマーク人」としてデンマーク文化の構成員として自覚しており，その意識はいわば歴史の流れの中で「たまたま」国境線の外側にいるということであり，少数民族の証として「ダネブロー」を掲げ，非常に強い絆でデンマーク国家と結ばれているのである．それゆえ，恒例である大晦日の女王によるテレビを通じての講話では，デンマーク国家の構成員に呼びかける際にもこの国境の南に存在する「デンマーク人」達を名指ししているのである．一方，北側の少数民族の旗は，黄色地に青色の２頭のライオン（シュレースヴィヒ公爵領の伝統的紋章）と古来のユトランドを南北に貫く交易路ヘアヴァイ（Hærvej）にあるイマヴァズ橋（Immervad Bro）をデザイン化したもので，決してドイツ国旗ではない．彼らは現在，南ユトランドの人口の６％，１万５千人の組織であり，第二次世界大戦期までオーベンローの北郊，標高 97m の丘クニウスビェア（Knivsbjerg ドイツ語で Knivsberg）で民族祭典を開いていた．そこには 1901 年にビスマルク像を有する 45 メートルの「ビスマルクの塔」が建てられていたが，南ユトランドがデンマークに「復帰」する直前に撤去されている．現在は，そこは少数民族組織の青少年の合宿施設となっているが，かつての巨大モニュメントを偲ぶ台座がのこり，その地を「英霊の森（Ehrenshein）」と呼び，森蔭の地面には第二次世界大戦時の５年間にこの地の出身者でドイツ軍兵士として亡くなった約 800 の人名が刻まれた銘板が年ごとに設置されている．2011 年にこの地を案内してくれたスナボー（Sønderborg）博物館の南ユトランド史家，故インゲ・アドリアンセン氏（Inge Adriansen 1944- 2017）は，ため息交じりに「英霊の森」という名は問題があると筆者に語っていたが，その翌年，少数民族組織が「追想の場（Gedenkstätte）」と名称を変更した．また，戦争犯罪人に処された人

物名もそこに並ぶ銘板から削除されている．

フレンスブルクの「北通り（Norderstraße）」には，南スリースヴィ・デンマーク系中央図書館やデンマーク系少数民族組織（SSV/SSW）本部建物や「フレンスボー新聞」社屋などがあり，そこをデンマーク系住民はデンマーク語で「北通り（Nordgade）」と呼んでいて，まったくデンマークの街角にいるのではないかと錯覚を起こしかねないのだが，1980 年にそこにあるレストランで「フレンスボー新聞」の記者からこちらがインタヴューをデンマーク語で受けた際のその記者の言葉が印象的であった．すなわち，「ここ（フレンスボー内）でデンマーク語で会話していることを，面白くないと思っている人々もいます」というのであった．

しかし, 2001 年冬にオーベンローを拠点にして建築用材を商っているドイツ少数民族の社長が，社員の福利厚生の一環として某在デンマーク日本人ピアニストの演奏と掛け合わせで筆者に講演を依頼してきた際，国境地帯を彼は車で案内してくれた．彼は，筆者の関心が国境にあるということから，クルスオー川河口のコウアムレ湾（Kobbermøllebugten）に跨る国境の木橋をドイツ領側から案内してくれ，また，国境の西部のローセンクランス（Rosenkrantz）集落の道路の真ん中に埋め込まれたデンマークとドイツを分ける国境標石を見せてくれた. その際，彼は，国境の南側で，すなわち，ドイツ内にあっても，土地の人々と会話する際もずーっとデンマーク語を使い続け，彼らにとってはドイツ系少数民族であることの意味が，平和な状況にあっては，心のアイデンティティの所在の問題であることが明白である．デンマーク系の少数民族のためのフレンスブルクの中央図書館にしても，そこの入り口までは少年少女たちがドイツ語を語りながらやってくるのであり，彼らが通っているデンマーク系中高等学校であるドゥボー＝スコーレ（Duborg skolen）でも，生徒たちは学外ではドイツ語を日常的に使っていると教師は筆者に説明した．校内の生徒たちのほとんどがデンマーク系少数民族の子弟であることから，デンマークを筆者が初めて訪れた 1969 年当時のデンマーク（本土）内のギュムネーショム風景と同じで，教室にいるのは移民子弟の混在しない「デンマーク人」のみであった．もはや，デンマーク国内にあっては，見受けられない風景であった．

1830 年代以降にデンマークのナショナルリベラルが「発見」したデンマーク民族の「スカンディナヴィア性（北欧性）」は，ドイツ性に対する絶対的対抗概念として存在した．その後もつねに「デンマーク人意識」の中に定着していったそのナショナルリベラル的発想が，1864 年以降（厳密にいえば，普仏戦争のフランス敗北の報が，デンマークに到達して以降）ありえないものとして霧散しても，スリースヴィ内における非ドイツとしての「デンマーク人意識」の根底には，その「北欧の最南に棲む者」としての意識が存在していく．すなわち，ナショナルリ

ベラル的「スカンディナヴィア主義」が存在理由を失って北欧3国内の政治的スカンディナヴィア主義におけるイニシアティヴをデンマーク人が失っても，1864年以降にもノルウェーの市民階級が呼びかける「スカンディナヴィア主義」の主張にデンマーク人が応えるべき根拠は，その国境の南側に取り残された北部スリースヴィの「デンマーク人」の存在であった．彼らがまさに「スカンディナヴィア同胞」であると意識することであった．彼らを再び「スカンディナヴィアに組み込むこと」が，その後のデンマーク民族の，ポスト・ナショナルリベラルのデンマーク世論であったといえよう．

それゆえ，今，南から車でデンマークに入ろうとする国境に，ダネブローとともに高々と掲げられている北欧各国の色とりどりの「スカンディナヴィアン・クロス」の姿は，まさにそれを象徴しているのである．そして，現ドイツ国家内のデンマーク系少数民族が，その象徴にダネブローを掲げるとき，そこに込められた意識の中に「自由なる北欧」に所属する意識を前面に押し出しているともいえよう．

2. ベカ=クレステンセンとインゲ・アドリアンセンとの交友

国境地帯が平和で安定したものとして謳われだしたのは，1995年7月11日の国境成立75周年記念式典が1万5千人を集めて開かれたころからである．会場とされた古戦場デュブル（Dybbøl）要塞は，1864年3月18日のプロイセン・オーストリア軍の総攻撃に一敗地に塗れた地であった．筆者はその祭典に招待され，多くのダネブローが翻るなか，式次が進んだ．『ポリティケン（*Politiken*）』紙は，祭典を目前にした7月9日の紙面に，「デンマーク人・ドイツ人共存のモデルは，ヨーロッパにおける他の国境紛争地へ“輸出”できよう」と提唱していた[4]．1990年台前半とは，ヨーロッパではバルト三国のロシアからの再独立（1991）に続き，ユーゴスラヴィア解体に伴う国境紛争の炎が上がり，スロヴェニア紛争（1991），クロアチア紛争(1991-1995)，ボスニア＝ヘルツェゴヴィナ紛争（1992–1995）と相次ぎ，国境を挟む国家間の血なまぐさい紛争に対して，このデンマーク・ドイツ間の憎しみに満ちた感情がはっきりと過ぎ去った過去の記憶の中へと移行していたのである．祭典で祝辞を述べたマルグレーテ女王（Margrethe 2. 1940-）もニュロプ・ラスムセン首相（Poul Nyrup Rasmussen 1943-）もかつて存在した民族間の不和や先の大戦前後の深刻な国境不安については何ら言及せず，明らかにドイツ人との不幸な歴史的体験の話題は避けられていたと，そこにいた筆者は感じた．75周年目にして初めてデュブルの丘にドイツ人少数民族組織の代表が

[4] 拙稿「南スリースヴィ問題とデンマークにおける国境間の対立――デンマーク・ドイツ国境成立75周年に寄せて――」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第42輯・第4分冊）130頁参照．

「民族和解」の象徴として招待されていたことも注目すべきである．そして，国境の南からやってきたデンマーク系少数民族組織の代表シュルツ（H. Schultz）が語った言葉は，皮肉めいているものの，「デンマーク人とドイツ人の差異は相変わらずのものだが，相互に尊重し合う心はより深まっている」という言葉で祝辞を終え，その言葉が呼び起こした聴衆の苦笑の交ったどよめきが，印象的であった．

また，筆者にとって「南ユトランド体験」で重要なことは，歴史研究者であり，1998 年にフレンスブルクのデンマーク総領事（Generalkonsul i Flensborg）となったベカ=クレステンセン氏（Henrik Becker-Christensen 1950-）との交友である．1980 年に筆者がオーベンロー（Åbenrå）の国境地域研究所を訪れて以来の付き合いで，彼の自宅を拠点にして南ユトランドの各地を訪れ，あるとき，彼の自宅の書斎で地方局 TV-Syd のテレビインタヴューを受け，筆者の南ユトランドへの関心のほどを述べる機会があった．そして，その 2 年後ほどのある日の午後，筆者が東京の自宅でくつろいでいた時，TV-Syd 局から突然電話があり，何か喋れという．そこで，「国境に何か新しいことがあるのか（Er der noget nyt om grænsen?）」と語ったところで，そこまでで OK という．その後に送られてきたビデオテープには，15 分ほどの番組が録画されていて，コウアムレの国境に向かうバンがフレンスボー湾に沿って走り，一人の若者が国境に着いてダネブローを旗竿に掲揚したとたんに，車から電話の呼び出し音がし，彼が受話器を取ると「国境に何か新しいことがあるか」と，日本からの筆者の声が聞こえる．画面は，そこから，以前に放送した筆者のインタヴューの放送が再現された次第である．ベカ=クレステンセンが総領事となって――国境の南側のデンマーク系少数民族との関係をつねに維持するために，デンマーク国家がフレンスブルクに総領事館を設けている――，彼の居宅でもある総領事館に幾度か宿泊させてもらったりした．小規模なデンマーク系住民の地域集会に彼が呼ばれて講演するときに同席させてもらって，伝統的なデンマーク系少数民族の講演集会――初めに参集者が歌を歌い，講演を聴き，ケーキでコーヒーを啜るといった――を経験したり，車で野中のヘアヴァイ（オクセヴァイ（Oksevej）），ヴァイキング時代の土塁であるダネヴィアケ（Danevirke）やコーヴィアケ（Kovirke），クレスチャンスフェルト（Christiansfeld），スカムリングスバンケン（Skamlingsbannken），クニウスビェアなどの地を案内され，南ユトランド史のあれこれを筆者の眼前に披露してくれた．面白いことに，コペンハーゲンから彼に出す手紙は，ドイツ内住所のフレンブルクの領事館宛てよりも，デンマーク国境の内側のパズボー（Padborg）の私書箱宛てのほうが早く届いた．国際郵便より，国内郵便が早く，毎日，その私書箱はあけられているという．そういったことからも国境地帯の状況が示されていて，興味深かった．

また，本誌『IDUN』Vol. 15（2002）に「Region Sønderjylland/Slesvig 考――デンマーク人の民族的アイデンティティと国境――」という論考で，筆者は 1997 年当時の南ユトランド県（Amt）と国境の南側の北フリースラント郡，シュレースヴィヒ=フレンスブルク郡，都市フレンスブルクとの，経済発展プログラムに関し論じた．その際，デンマーク側が，EU 内の国境を跨いだ開発地域設定構想である「ヨーロッパ地域（Euroregion）」の一つとする正式な名称に，徹底してドイツ語の「シュレースヴィヒ（Schleswig）」の名称を用いることを拒否したことを指摘した．「南ユトランド（Sønderjylland）」を正式なドイツ語名称にもわざわざ持ち込み，「Region Schleswig/Sønderjylland」とさせ，プロジェクトのドイツ側当事者にデンマーク語字母 Ø を使わせるという煩わしさをあえて持ち込んだのである．デンマーク語の正式名称は「Region Sønderjylland/Slesvig」であり，Schleswig の語がア・プリオリに醸し出す「内ドイツ的」な歴史的イメージの払拭を図っていたのである．それゆえ，シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州議会の主要人物や，『南ドイツ新聞（*Süddeutser Zeitung*）』・『フランクフルター・アルゲマイネ（*Frankfurter Allgemeine*）』紙の新聞人らがデンマーク側の「思いがけない行動を伴った反ドイツ偏見」を驚き，第二次世界大戦以降の「民主主義ドイツに対するいわれのない反感」に戸惑いを隠さなかった[5]．それほどにデンマーク側の積年のこだわりは，直接の相手でさえ――ましてや第三者に――理解されようがなかったといえよう．

ところが，事態の決定的な変化がドイツ側の対応によって齎されることになる．ドイツ側が動くことで，一挙に，デンマーク・ドイツ両民族間の相互理解，良好な善隣関係，少数民族問題の克服といった“成熟した関係”が見事に形を成して現れたのである．それは 2011 年 9 月 10 日のフレンスブルク旧墓地における「イステズ・ライオン（Istedløven）」像の除幕式である．当時，在外研究でコペンハーゲン大学に滞在していた筆者は，前出のアドリアンセン氏の口添えで式典に夫婦揃って招待され，その歴史的出来事に臨むことができた．

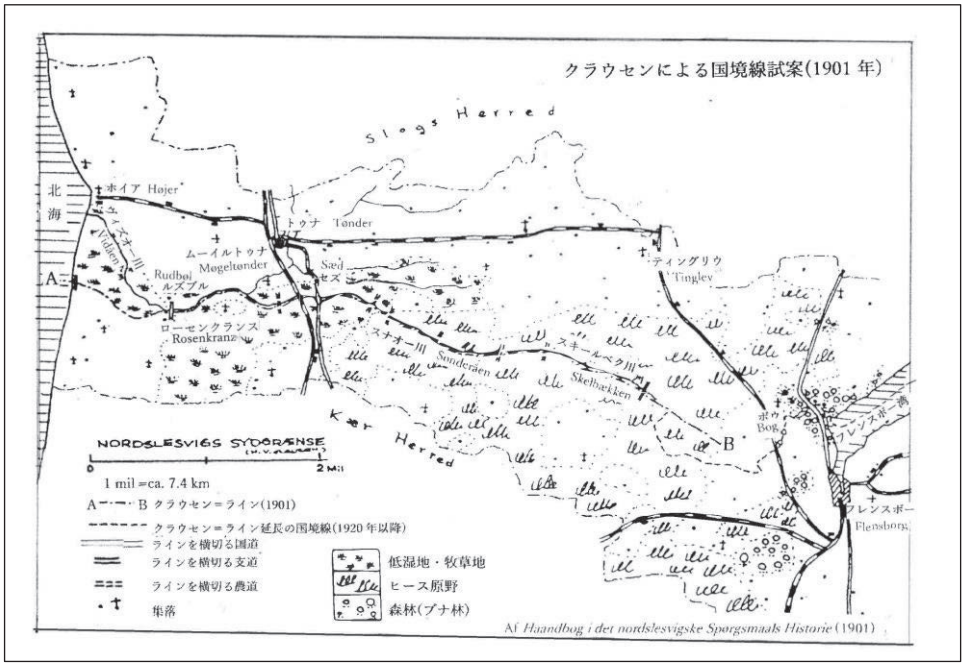
1850 年 7 月 25 日の第一次スリースヴィ戦争の最後の激戦地イステズ（Isted）での戦いで没したデンマーク将兵を悼んだビセン（H. W. Bissen 1798-1868）作の 3 メートルを超えるライオン像が，1862 年にフレンスボーの墓地に創建された．1864 年の第二次スリースヴィ戦争のデンマークの敗北により，結果としてプロイセン軍が戦勝のトロフィーとしてそれを持ち去ってベルリンに運び，士官学校に安置し，そして，1945 年第二次世界大戦のドイツの敗北により，アメリカ軍がそのライオン像をデンマーク王クリスチャン 10 世に寄贈する形で，コペンハーゲンにもたらした．武器庫博物館前に長らく据えられていたが，王立図書館が「黒

[5]「Region Sønderjylland/Slesvig 考――デンマーク人の民族的アイデンティティと国境――」『IDUN』Vol. 15（大阪外国語大学デンマーク語・スウェーデン語研究室 2002）227 頁参照せよ．

ダイアモンド Den sorte diamant」」と呼ばれる新たな建築物となり，そのあたりがキルケゴールの読書する銅像に因んで文化の香り豊かな「キルケゴール空間（Søren Kierkegaards Plads）」と名付けられ，キルケゴールは 1848 年当時，ナショナルリベラルの企図を嫌い，体制の維持を望む「ヒールスターズ（Helstat）」派であって，ナショナルリベラルがもたらしたスリースヴィ戦争に所縁のあるライオン像の設置場所としては不向きとなっていった．東西ドイツがデンマークなど周辺諸国の望む形で再結合され，ドイツが信頼に足る隣人であるとデンマーク人が実感を持つようになり，ライオン像の置かれるべき場所が議論されだした．そこに，チョイシュナー市長（Klaus Tscheuschner）の発議により，フレンスブルク市議会がライオン像の「帰還」を可決したのである．市議会がライオン像の建立の本来的意味を納得の上で，ナショナリズムを後方に押しやり，市が 600 年以上にわたってデンマークのもとにあったことをも積極的に受け止めようとしたのである．そこではライオン像が「忘却の地（glemselssted）」に立つのではなく，もろもろの解釈を含めた可変性のある「変化」をフレンスブルクが受け入れ，それを選択したのだと，アドリアンセン氏は大著『デンマークにおける回想の地（*Erindringssteder i Danmark—Monumenter, mindesmærker og mødesteder*）』(Museum Tusculanums Forlag 2010, s. 391）内で述べている．そして，注目すべきは，これまで述べてきたこの国境地帯をめぐる平和を求める努力がつねにデンマーク側から行われてきたのであるが，この 2011 年のイステズ・ライオンの帰還という怨讐を超える行為が，ドイツ人側から行われたことに，この地に常に存在してきた民族抗争の歴史が大団円を迎えたと，筆者は考える．

そして，付け足すことを許されるなら，筆者の 1990 年代後半以降の南ユトランド事情・デンマーク史の研究上のよき協力者・理解者，史料及び情報提供者は，ビアギト・イェンヴォル（Birgit Jenvold 1961-）氏である．知り合った当時はコリングフース城博物館（Museet på Koldinghus）の学芸員であり，その後にコペンハーゲンのアメーリェンボー博物館館長代理（Daglig leder）及び王室資料コレクション（De danske kongers kronologiske samling）の学芸員となり，彼女を通じてアドリアンセン氏との交流が始まった．1920 年南ユトランドがデンマークに復帰し，7 月 11 日にその地に白馬に跨ってクリスチャン 10 世が踏み入った際に，白衣を着て王を迎えた少女たちの一人が彼女の祖母であり，筆者にとっては南ユトランドを象徴する人物として，イェンヴォル氏がいる．フレンスブルクのイステズ・ライオンの除幕式に際しても，筆者夫妻の隣には，そのイェンヴォル氏，アドリアンセン氏がいたのである．

3. H・V・クラウセン=ライン



現在のデンマーク・ドイツ国境が成立した背景を眺めてみよう．現国境線は，「クラウセン=ライン（Clausen-linien）」と呼ばれ，歴史家で高校教師 H・V・クラウセン（*Hans Victor Clausen* 1861-1937）が 19 世紀末に思案したものである．1864 年，デンマークの敗北の結果，若干の領土的修正を経て，コンゲオー川以南の地がプロイセン・オーストリア（普墺）に割譲された．1866 年，普墺戦争後のプラハ条約第 5 条に，ナポレオン 3 世の肝煎りで将来住民投票を経て「北部スリースヴィ」がデンマークに「復帰」できる可能性が語られ――実際には，ドイツ・オーストリア間でプラハ条約が 1878 年に無効となり，消滅――，条約が廃棄されたのちも，デンマーク系住民の間にはその可能性を根拠にデンマークに復帰すべき「北部スリースヴィ」地域の検討模索が続き，クラウセンらが農家など一軒一軒を訪問して調べ上げ，学校・教会で用いられるデンマーク語の南限線を考慮し，人々の意識等を調査して，人の居住の少ないヒース原野・低湿の草地の間を流れる河川に従う「境界線」案を導き出した．それがスリースヴィをほぼ中央で横断する 68 kmの最短ラインとなるよう試案され，19 世紀末の段階ですでに示されていた．ところが，図で示すように[6]，西側から確定してきたラインが，この地方で

[6] この図では人口が希薄のヒース原野・湿地の牧草地などを貫いた A――B 線で，クラウセンによる北部スリースヴィの南限の試案線を描いた．1901 年当時，フレンスボー市の「デンマーク系北部スリースヴィ」への包含を躊躇していたことがわかる．出典は，Franz von Jessen red., *Haandbog i det nordslesvigske Spørgsmaals Historie*, 1901 である．

最大の都市フレンスボーを前にして，1ミール（約7.4km）を残して東に進んでいかないのである．すなわち，フレンスボー市の帰属の議論が棚上げされていたのであった．1867年の北ドイツ連邦議会議員選挙時には確実にデンマーク系が過半数を占めていたのだが，その後の都市の発展によって南からの流入者が多く，その地をデンマーク「復帰地域」に含めるかが最大の議論となっていたのである．

1918年にドイツが第一次世界大戦で敗れ，ドイツ外務大臣ゾルフの「書翰」によって北部スリースヴィのデンマーク復帰の住民投票による手続きが認められ，1918年11月17日，それを根拠にオーベンローでは北部スリースヴィ選挙人協会理事会が開かれ，復帰への手続きが決定された．5項目からなる「オーベンロー決議（Åbenrå-resolutionen）」と呼ばれる．

1）北部スリースヴィを単一の投票区とし，住民が諾否を表明することで，全体の結果をもってデンマークへの復帰か否かを判断する．

2）北部スリースヴィとは，スリースヴィ公爵領のうちの，以下のラインの北側の地域を指す．（東から）アルス島（Als）の南端からフレンスボー湾（Flensborg fjord）に入り，コウアムレ湾に至り，クルスオー川の谷線（Krusådalen）に入り，フレスリウ（Frøslev）の南を巻いてパズボー（Padborg）を国境の駅とし，さらに西へはスローウス地区（Slogs Herred）とケーア地区（Kær Herred）を分かつスキールベク川（Skelbækken）に従い，スナオー川（Sønderåen）・ヴィズオー川（Vidåen）に沿ってその北に曲がる地点にまで進み，そこからはまっすぐに北海（Vesterhavet）へと進み，シル島（Sild /Sylt）の北端を巻いて海上を西に進む．

3）投票権は以下に該当する条件を満たした20歳以上の男女に与えられる．

a. 北部スリースヴィに生まれ，居住する者

b. 北部スリースヴィに少なくも10年以上居住する者

c. 北部スリースヴィに生まれたもので，ドイツ官憲に退去させられた者

4）投票権は投票者個人の意思を保証する形式で，筆記にて行使される．ドイツ官憲による投票への関与は排除されるべきである．

5）北部スリースヴィに隣接し，投票を希望する中部スリースヴィ内の地域が，別個に投票することで，デンマークに復帰したいか否かを表明する権利を有していることを，当然と見なす[7]．

すなわち，第2項で，クラウセン＝ラインがフレンスボーの北側を通ることが表明され，また，第5項でフレンスボーをも含む中部スリースヴィ内の個々の地区ごとにデンマーク復帰の可能性を謳わざるを得なかったのである．第2項にあ

[7] Troels Fink, *Da Sønderjylland blev delt 1918-1920*, Bind I, Institut for grænseregionsforskning 1979, s. 73.

るこのクラウセン＝ラインが，今に至る国境線となるのであり，それとは完全に矛盾する第5項の文言は，実は，選挙人協会理事会でハプニング的に提出されたフレンスボーに住む人々の「祖国復帰」の意志を理事会が抑えきれなかった結果なのである．そのクラウセン＝ラインは，理事会を取り仕切っていた，デンマーク少数民族を代表するドイツ帝国議会議員 H・P・ハンセン（Hans Peter Hanssen 1862-1936）らの絶対に譲れない将来のデンマーク・ドイツ国境であり，彼らはフレンスボーを彼らの安寧のためにデンマークに「復帰させない」ことが絶対的命題であった．

実際，最終的にはヴェルサイユ条約第109条の規定により，オーベンロー決議第2項のまま，1920年2月10日にクラウセン＝ライン以北をひとまとめに諾否を問う住民投票が行われた（第1投票区）．75%のデンマークへの「復帰」票，25%のドイツ「残留」票が表明され，第1投票区のデンマーク復帰が確定した．そして3月14日に第2投票区での住民投票が行われ，全体でもデンマーク票が28%という結果に終わり，地区ごと（kommunevis）の結果でデンマーク復帰の可能性を判断することになっていたが，どの地区もデンマーク票が過半数を占めることはなく，フレンスボーでもわずかに25%がデンマーク票であった．

4. コペンハーゲン大学歴史学教授オーウ・フリース

何故，ハンセンは，クラウセン=ラインにこだわらざるを得なかったのだろうか．「オーベンロー決議」がなされる以前の，そしてその決議が発せられることになる根拠は何なのであろうか．その決議が発せられる3日前の日付でドイツ外務長官ゾルフ（Wilhelm Solf 1862-1936）の名でハンセンに「送られた」いわゆる「ゾルフ書翰（Dr. Solfs brev）」なるものが存在し，それが北部スリースヴィ住民自らが「祖国復帰」をめざして第一声をあげることを促す根拠として機能したのである．ところが，実際は，1918年11月14日，コペンハーゲン大学の歴史学教授であるオーウ・フリース（Aage Friis 1870-1949）がベルリンに行っていて，ドイツの外務長官執務室で，目の前に広げられた地図の上に将来のデンマーク・ドイツ国境を，長官に鉛筆で指し示していたのであり，その成り行きの中で「ゾルフ書翰」が出来上がっていったのである．それは，実際の住民投票が行われる1年半前のことであった．そのことは，デンマークの歴史書には出ていない．それが明るみに出ることは，大戦中の中立国の一大学教授が敗戦国の首都に入っていて，上記の行動を行っていたという国家的スキャンダルであり，歴史家であるフリースもそれを歴史記述から封じ込め，またハンセンも語らない．そして，のちの研究者もそれには言及しさえしない．

国境問題史に関する専門家は，オーフース大学教授でフレンスブルクのデンマー

ク総領事でもあったトローオルス・フィンク（Troels Fink 1912-1999）だと，筆者はデンマークに行くたびにほとんどの研究者に言われ，その3巻本の著書『南ユトランドが分割されたとき 1918-1920（*Da Sønderjylland blev delt 1918-1920*）』（1979）を手にし，その参考文献あたりからたどり，筆者はフリースの国立公文書館所収の個人私文書の存在にたどり着く．当該人物の死後 50 年が経っていない場合には，その私文書に触れるには文書管理人である親族の許可を必要とするとあり，社会問題研究所所長のヘニング・フリース（Henning Friis 1911-1999）に手紙を出し許可を得た(1985)．また，管理人がいなくなったのちは，死後80年までは，公文書館が管理する決まりである．実際，フリースの個人文書からは興味深いものが出てくる．

まずは，「十月宣言（Oktoberadressen)」の 10 枚を超える草稿の存在である．それは第一次世界大戦最末期の 1918 年 10 月にあって，北スリースヴィの祖国復帰のための住民投票地域の設定を要求するものであり，中立国であるデンマーク政府の立場を擁護し，敗戦を目前としたドイツ国民の「ドイツ民族の良心（det tyske folks højhjertethed)」に訴える宣言であった．またフランスなどの連合国の勝利の勢いに乗ってデンマークへの復帰地域をできるだけ大きくしようとする国内の勢力を牽制する立場表明でもあった．「決してドイツ民族の権利を踏みつけようとは意図しない．我々の望みは，ただ，デンマーク語を語り，デンマーク人として感じ，デンマーク人であり続けたいとする住民をデンマークに復帰させることである――すなわち，それは，デンマーク系北部スリースヴィの全域であって，デンマーク系北部スリースヴィのみであり，それ以上のなにがしかもデンマークに結合させてはならない」と語るものであった．フリースが書いた草稿に始まって，試行錯誤の推敲が見受けられる数枚のタイプ原稿，そして活版印刷の存在――それらには刻々と集まる鉛筆やペン書きの署名などが紙面に書き込まれ――，限られた短期間の緊張した状況がそれらを目にして感じられた．まさに政府が行おうとする対ドイツ寛容政策に対し，著名人らがそれを支持していこうとする「アリバイ作り」の宣言書の作成の現場であった．これに関する筆者の論文は「第一次世界大戦の終戦とデンマークの『十月宣言』」『村岡哲先生喜寿記念 近代ヨーロッパ史論集』（1989）である．

ところが，その後の公文書館通いの中で思いもかけない特殊な文書に出会うのである．それを実際に見たであろうフィンクが見落としている文書である．そして，たぶん彼の後にもその文書を見たはずの研究者，例えば，ベカ=クリステンセンらも著作の中で触れることのないものであった．それは，「1918 年 10 月～11 月の覚え書（Optegnelse fra oktober-november 1918)」である．1918 年 11 月末にフリースが口述し，政治学を専攻していた息子のフィン（Finn Friis 1897-1978）

がタイプライターで速記したものである．

5. 1918 年 11 月 14 日の出来事

1918 年 11 月 14 日，ゾルフ外務長官はデンマーク少数民族組織の代表，帝国議会議員 H・P・ハンセンに対して書翰を送り，その中で北部スリースヴィの帰属を問う住民投票の実施をウィルソン・アメリカ大統領の平和綱領に則って認めた．書翰上にはゾルフがハンセンに対し「貴下北部スリースヴィのデンマーク系住民の諸団体による私宛てのきわめて友好的な請願の趣旨に鑑み」た，という文言が存在する．デンマーク史の「正史」のなかの記述としても，また当該問題を扱った史料集を通じても，「ゾルフ書翰」の存在それ自身は揺るぎのない“事実”であり，のちのヴェルサイユ条約に則った北部スリースヴィの住民投票の根拠としてそれが記されている．そして，フリース教授らがまとめた史料集においても，（ア）1918 年 10 月 24 日のハンセンの帝国議会でのデンマーク復帰要求の演説，（イ）11 月 12 日付の北部スリースヴィの民族自決主義の適用を求めた 287 団体による署名文書(デンマーク少数民族系の地方紙『ハイムデール（*Hejmdal*）』紙掲載)，（ウ）11 月 14 日の「ゾルフ書翰」，（エ）その 2 日後，住民投票の実施の手続きを明記したオーベンローでの北部スリースヴィ選挙人協会の理事会の決議内容，の順に並べられている．デンマークの国境変更に至る原初的流れが整然として並んでおり，住民投票実施に至るドイツの敗戦当時の史料的典拠が提供されている．ところが，フリースの上記「覚え書」に記された内容を読むと一挙に事情が異なってしまうのである．

すなわち，以下のようになる．フリース教授は，大戦の休戦の報を受けて直ちにベルリンに向かってコペンハーゲンを列車で出発し（11 日朝），12 日 23 時ベルリン着．ハンセンらと協議してから，14 日午前 11 時から 12 時にドイツの外務次官，社会民主党員のダーフィット（Eduard David 1863-1930）と協議して，さらにフリースは「ゾルフ書翰」の下書きをあらかじめ書いていた．フリースの筆跡による「ゾルフ博士」と署名した下書きが，フリースの個人文書ファイルに存在している．午後 1 時，“当該問題の知識があまりない”ゾルフ外務長官の執務室にフリースは出向いた．そこでは，ゾルフに請われるままにフリースは“鉛筆で”将来のデンマーク・ドイツ国境が引かれるべきラインを，目の前の机に広げられていた地図の上に描き示した．それは「クラウセン・ライン」であり，そこにはデンマーク側があえてスリースヴィ内最大の都市フレンスボーを復帰地域から除外した「禁欲」的な領土要求が表われていた．それを見て，了承したゾルフ長官が，その件をどのように世間に公表するかと言いだした際に，フリースはその朝のうちに「ハンセンが（私のポケットに）差し込んでいた，（オーベンローから）到着

したばかりの 11 月 12 日付」のハイムデール紙を取り出して，それに応える形がいいと提案し，ゾルフに了承させている．なぜなら，長官に会う前に，フリースは「ゾルフ書翰」の下書きに，そのように書いていたからである．その後，手続き的に臨時人民代表委員のハーゼ（Hugo Haase 1863-1919）の承認を得たのち，ゾルフによって清書された「書翰」をフリース本人が受け取って，午後 9 時過ぎにハンセンにフリース自身が“手渡し”，ハンセンは午後 11 時にそれを携えて故郷を目指してハンブルク行きの夜行列車でベルリンを発った．そして，オーベンローの選挙人協会理事会が 2 日後に控えていたのだ．

さて，以上のことはフリースの帰国後の口述速記による「覚え書」の内容を読んでわかることであり，フリースは 1921 年に『傍観者（*Tilskuren*）』誌に，「1918 年 11 月のベルリン旅行（En rejse til Berlin i November 1918）」を著しても，本件の詳細は語っていない．フリースもハンセンもその日の行動を回顧録等で語ることはなく，見事にそれを隠蔽し，事実を公表することなく時は過ぎていった．たぶん筆者の推測ではあるがその「覚え書」はフリースの死まで彼の文机の引き出しなどの中で極秘の扱いで眠っていたに違いない．フリースは歴史事実――彼の歴史的行動――を歴史家としての意識から「覚え書」という形で残していても，それを公表することなく本人も速記した息子のフィンも，墓場まで持って行ったのである．そして歴史家としての行為としてその時代の史料集を上述のように編纂することで，自ら行った行為の痕跡を丁寧に「歴史」から隠蔽し，彼の時代の大部なデンマーク史の「正史」とも言うべき，フリース，弟子のリンヴァル（Axel Linvald 1886-1965），同じ北部スリースヴィに関心を寄せる中世史家のマケプラング（M. Mackeprang 1869-1959）が編纂した 8 巻本の『デンマーク民族の歴史 *Det danske Folks Historie*』（1927-29）においても，1918 年の記述の執筆を少年時代からの友人で歴史家でもある急進左翼党の政治家モンク（Peter Munch 1870-1948）に担当させることで，自らのベルリンでの行状を徹底的に隠蔽したのである．いわば，フリースによる歴史叙述の「モノポリー的状況」が呈されていたといえよう．というのは，第一次世界大戦後，デンマークの為政者側が最も恐れていたことは，第一には，1920 年の新国境の成立過程が明かされることで，ドイツの敗北という弱みに付け込んでドサクサに紛れて“事情をよく知らない”――さらに長官としての在職期間はわずか 70 日（1918 年の 10 月 4 日から 12 月 13 日）であった――外務長官から帝国領土を掠め取ったという印象をドイツ国民に与えてしまうことであり，ドイツが再び強国となり，デンマークの国境決定に対し，「後ろ指」を指されてしまうことであった．第二には急進左翼党政府は，国内の保守派に利敵外交と批判される証拠を与えることを恐れた．現実に急進左翼党による“ドイツに対する過剰な気遣い”であると「親ドイツ人路線（Tyskerkursen）」を批判する論陣

が存在していた．ハンセンは北部スリースヴィの「祖国復帰後」に復帰地域を担当する「南ユトランド担当相」に就き，国境地帯の安寧に尽くした．そして，オーベンロー決議において，フリースによってゾルフに示されたクラウセン＝ライン以北に住民投票地域を設定し，地域全体をひとまとめとし，「一体」としてその多数決をもってデンマークに復帰する意思を明確にすることであった．しかし，そのはずが，上記オーベンロー決議の第 5 項にあるように，結果として住民投票地域が二つ設定される可能性が打ち出されたのである．デンマーク復帰はデンマーク系を自認する人々の長年の願望であり，それを封じることはできなかった．例えば，ハンセンとともにベルリンにいて 11 月 14 日に彼とともに帰郷していったプロイセン邦議会議員のクロペンボー＝スクロムセーヤ（H. D. Kloppenborg-Skrumsager 1868-1930）である．彼はのちに反ハンセンの側に立ち，第 2 投票区設定問題に尽力した人物で――彼の手記においては，フリースとハンセンの間だけで進められたベルリンでの秘密行動を批判していたが，彼にはその内容は漏れていなかったが――，“祖国”復帰地域にどこまでが含まれるかということは，デンマーク系住民個々にとっては，きわめて重要なことであった．

結果的には，新国境線はクラウセン=ラインとなった．すなわち，フリースがゾルフの目の前で描いた「国境線」の試案線が，現実のものとなり，今に至る国境線となった．それは住民投票結果をも先取りしており，最も国境不安を掻き立てられたナチスの興隆期も，第二次世界大戦時のドイツ占領期も，第二次世界大戦直後の時期にも耐えて今に至っているのである．それゆえ，何故，大戦後の住民投票地域が，2 地域となったかという理由は，フリースのベルリンでの行動を掴まないと理解できないのであり，その謎がフリースの行動に関係していたということを，デンマーク国民は「いまだに」知らされていないのである．

1920 年の住民投票後，フレンスボーを含む第 2 投票区がデンマーク復帰を果たせなかったことで，保守国民党及び左翼党支持者によるフレンスボー市のデンマーク編入を求める「フレンスボー運動（Flensborgbevægelse）」が高揚した．その結果，領土的禁欲にこだわったサーレ（C. T. Zahle 1866-1946）首班の急進左翼党政府は，国王によって辞職が求められた．それまでの慣例であったその後継首班候補を辞職勧告時に尋ねられなかったことから，それが国王による越権行為だとして一挙に社会民主党支持者らが中心となってゼネストが謳われ，社会不安が浮上し，デンマークではいわゆる「復活祭危機（Påskekrisen）」が生起した．総選挙後，新政権としてニアゴー首班の左翼党政権が誕生したものの，新政権はフレンスボー運動の新局面を生みだすことができないで終わっている．いずれにせよ，フリースのベルリンにおける秘密裏の行動の詳細は白日の下に晒されることはなかった．

6. 小国の「国家理性（raison d`État)」とは

何故フリースの「覚え書」を北部スリースヴィの「祖国復帰」問題を専門に扱っていたフィンクが見落としたのであろうか．フリースの私文書内のファイルへの所蔵のされ方からいって，それを見いだすことは困難ではなく，私はそれが意図的であったと判断する．

フィンクの父方の祖母セシーリェ（Cæcilie1851-88）はハンセンの姉であり，また彼がオーベンロー育ちということでは，まさに北部スリースヴィ問題の人間関係の只中にいる人物であり，彼の学業もキャリアもそこに根があり，フィンクは当該問題のすべてを知り尽くしていた人物であるといえよう．すなわち，当該問題に関する知識が彼のもとに集中するとはいえ，フィンクは切実な国家的存続にかかわる研究テーマには積極的に真実に迫って踏み込んでいくことができなかったともいえよう．デンマークは小国であり，現在の総人口でも 570 万人である．1928 年にオーフース大学ができるまでは国内にはコペンハーゲン大学が一つあるのみで，学者・研究者の数も限られており，学問分野での卓越した研究者がいる場合には，その人物に学問的評価が集中し，同じテーマでの新たな研究が妨げられていたといえなくもない．それゆえ，スコーネ（Skåne）のデンマークからスウェーデンへの「国替え（Overgang)」(1658）に関しては，K・ファブリーシェス（Knud Fabricius 1875-1967）とか，北スリースヴィ問題ではフィンクであるとか，そういった言い方が伝統的に受け継がれてきたのである．そして，現在でも，学者・研究者の数は決して多くはなく，また，「同時代史」が扱う分野での傾向でいうならば――筆者の管見では――例えば社会民主党を扱う研究者はやはり社会民主党支持者かその関係者であることが普通であり，その論者が中立的にそうしたテーマを論ずることが少ないのである．人間関係・社会関係のしがらみの中で，発言者の立ち位置が往々にしてあらかじめ見えてしまうのである．例えば，当該問題では，第一次世界大戦時にドイツ兵として東プロイセンに遣わされ，「祖国復帰」の議論で姦しいスリースヴィの故郷に帰ってから急進左翼党の対ドイツ外交路線に激しく反対したジャーナリスト，A・スヴェンソン（Adolf Bernhard Svensson 1880-1963）の息子であるビャアン（Bjørn Svensson 1910-2010）は，『親ドイツ人路線』(1983）や論文「隠された脚本（Det skjulte spil)」(1992）等を著し，急進左翼党の対ドイツ外交を明確に批判したが，その立ち位置は父の政治的立場を踏襲するものであった．狭い社会にあって，逆に無関係の者が，無関係のテーマを論ずることが難しい社会でもあるのだ．そういったデンマークのような小さい社会の状況下で，筆者のような外国人が，それなりの中立的視点から問題設定をし，それを論じることに意味を見いだすことができるのではないだろうか[8]．

---

[8] 筆者は当該問題を，1991 年「オーゲ・フリースとゾルフ書翰――1918 年 11 月 14 日ベルリン

当時のデンマークの急進左翼党政権による，国内の対抗勢力――時代状況からは彼らがマジョリティーであり，“普通の国”ならば，当たり前といわれるような要求として敗戦国ドイツの弱体化を目指した戦勝国フランスが支持するフレンスボーの「祖国帰還」を求めていた――に隠れてのベルリンでのフリースの隠密行動は，その後もフリースからもハンセンからも徹底的に隠蔽され続けた．ドイツに対し行った彼らの領土的「禁欲（spægelse）」こそがのちにドイツが勢力を盛り返してきたときに，ドイツからの国境の再修正の要求を封じる手立てとして考えられていたのである．筆者は当該問題を議論するとき，「国家理性（raison d`État）」という言葉が小国の側にもあり，小国にも小国なりの国家存続を図るべきマヌーヴァが存在すると考える．そう理解することで，それが第二次世界大戦後のフィンランドによる対ソヴィエトの安全保障上の外交的努力――「フィンランド化」と称した意図的誤解が西側世界で語られたりしたが――と符合するような，小国デンマークによる隣国，ドイツに対する国家存続をかけた必死の対応であったと理解できる．それは，デンマークでは“歴史事実の歴史記述上の隠蔽”という形で表れたのである．

そして，時代の筆頭的歴史家が編集に名を連ねる「正史」――前述の 8 巻本『デンマーク民族の歴史』のような――としての大部な歴史書の存在を考えてみたい．たとえば，大部で数巻に及ぶ「日本史」が上梓された場合，現代にまで記述が及ぶその最終巻とは何なのであろうか．我が国の「世界史」や「日本史」の教科書を例にとっても，古代から現代までが網羅され，「歴史」の名のもとに，その記述は「最現在」までの経年の出来事が並んでおり，それは，本論の初めに言及したように，「史料批判」が完全な形で持ち込むことのできない対象が論じられていることになる．その記述は，古代から中世，近世，近代と語られてくる「歴史」記述と同じ手続きではない．明らかに 50 年前までの事象を扱った「史料批判を前提とする歴史記述」とは異なっていることを，我々は知るべきである．そこでは「歴史」を語っているようで，それまでの「歴史」叙述とは異なり，教科書などでは，いかに“今”を語っているかを競うように，ここ数年の事件に言及することが良いことのようにされている．すなわち，一貫した「歴史書」が，その最後の部分において，「歴史書」ではなくなっていることを知るべきである．

それゆえ，フリースらの歴史事実の隠蔽を意図とした「デンマーク“正史”」が出来上がっていたのであり，さらに歴史家たちが歴史の編纂のされ方を熟知していて，関係史料を収集して出来上がる史料集までもが，彼らの意図のままに取捨

にて――」（『史観』124 冊），2002 年「ゾルフ書翰の謎（上）」（『早稲田大学文学研究科紀要』47 輯），2003 年「ゾルフ書翰の謎（下）」（『早稲田大学文学研究科紀要』48 輯），2007 年「Historiker i politik. Fornyede overvejelse over Dr. Solfs brev af den 14. november 1918」『*Historisk Tidsskrift*』Bd.106, Hæfte 1.（Den danske historiske Forening 2006）で扱った．

選択されて大部の史料集として編纂され，後続の研究者に――読者に――彼らにとっての「都合の良い歴史」を伝えようとしたのである．彼らが隠し通して守ろうとした事実は，大国ドイツの隣人として生き残るべき「小国」の“国家理性”的欲求に基づく行為の隠蔽であり，当時の彼らが「敵」として警戒したものは，敗戦後に復興するであろうドイツ国内の危険なナショナリズムであり，ドイツ敗北の事態に楽観的に対応しようとするデンマーク国内の先を顧みないオプティミズムであった.歴史家の所業としては非難されるべきものであろうが,その努力が,現在までに至る国境線の存続につながるのである.

おわりに

ちなみに，第一次世界大戦終了時に変更されたドイツ国境線のうちで，唯一，今でも存続している国境線は，デンマーク・ドイツ国境線である.

クラウセンが住民投票の実施を前にしてクラウセン=ライン以南の地を――特にフレンスボー市を――デンマークに「復帰」させるべきではないと主張していた．フレンスボーは「北部スリースヴィ」に属するけれども,「デンマーク人の北部スリースヴィ」にはもはや属してなく，フレンスボーを必要とする人々は，市の北側よりは南側の人々であり，彼らはドイツ人の意識を持っており，その人々の存在のためにフレンスボーをデンマークに「復帰」させてはならない．フレンスボーの存在が，新たなドイツの領土要求を生むからであるとし，ドイツに帰属したいとする多数の人々がデンマークに含まれることは，彼らはデンマーク内の少数民族と化し，将来のデンマークにとって危険な状況を作り出すことになると論じた．筆者には，次のクラウセンの言葉が，印象的である．すなわち,「我々自身に対してされたくない不正義を，他者に対して行いたくない．我々が関わりもない，また積極的に加わろうとも思わない国や文化的社会に組み込まれることを強いられたくない」という原則に尽きる[9]．まさに，デンマーク側が，自らの意志で決定できるチャンスに，自らが選んだ道がそれであった．一方，1933 年のナチ党シュレースヴィヒ国境担当，ペパーコーン牧師（Johann Leopold Peperkorn 1890-1967）のスウェーデン紙『ユーテボリ商業・海運新聞（*Göteborgs Handels- och Sjöfartstidning*)』の 4 月 18 日に掲載された言葉がある.「国が強力な政府を持てば，国は常に拡張を望む．それはまったく自然の道理である．いつだってそうである．弱い政府を国が持ったら，国自身が弱くなり，外からの圧力に抗しきれない．その国境は戦争やほかの方法で破られるものなのだ．それに対し強い政府を持つならば，状況は逆なのだ．自然の法に従って，国は外へと広がっていく

[9] H. V. Clausen, *Før Afgørelsen*, Gyldendalske Boghandel Nordisk Forlag 1918, s. 5.

ことになる．国境は外へと圧力がかかり，弱い国が退くのだ.」と[10]．15 年の時を経過して，こうした発言をする隣国の存在を見越したデンマーク側の対応として選んだのが，クラウセン=ラインであった．

På grundlag af princippet ”Vi vil ikke begå den uret mod andre, som vi ikke kunne ønske skulle vederfares os selv” skal grænsen bygges

──Og til sidst kom Istedløven tilbage til sit oprindelige sted──

Makoto Murai

Resumé

Jeg har i mange år forsket i Sønderjyllands historie, og som historiker har jeg i tidens løb skrevet en række afhandlinger og artikler med kildekritik som metode. I begyndelsen af min studietid fortalte en af professorerne, at historien skulle anskues og behandles på passende vis, f.eks. så der går mindst 50 år, før man forsker i et emne, idet den nødvendige objektivitet derved bedre kan undgå aktualitetens faldgruber og tidens strømninger.

Siden 1970 har jeg gennem årene selv haft mange oplevelser af meget forskellig art og karakter i Sønderjylland i forbindelse med mine studier og forskningsprojekter. I sådanne samtidshistoriske sammenhænge har en tilgang, der kun baseres på kildekritisk tilgang, forskellige svagheder. Derfor forekommer en mere etnologisk eller antropologisk indfaldsvinkel med forskeren som medvirkende eller observatør fagligt meget givende og åbner mulighed for autenticitet i beskrivelsen af f.eks. historiske begivenheder og tolkningen af disse, der uundgåeligt vil have et mere eller mindre bevidst subjektivt præg.

Artiklen handler om mine egne oplevelser i Sønderjylland ved forskellige begivenheder. Den kommer bl.a. ind på min første cykeltur i marts 1970, interviews med to syd- og nordslesvigske personligheder i 1980, Folkefesten på Dybbøl Banke i 1995 i anledning af Genforeningsjubilæet og Istedløvens tilbagevenden til *Flensborg* i 2011.

---

[10] Peter Hopp/Carsten Morgensen red., *Ostersturm/Påskeblæsten 1933*, Flensburg 1983, s.170-173. 1933 年 6 月 18 日レンツブルク（Renzburg）のシュレースヴィヒ=ホルシュタインのナチ勢力の企画した「復活祭旋風（Paaskeblæsten/Ostersturm）」と呼ばれる「国境地方示威大集会」にかかわる記事として収録されている．